

# 1 水泳プールの重大事故の実態

武藤芳照 東京大学大学院身体教育学講座・教授、東京厚生年金病院整形外科客員部長

## はじめに

水泳は、全身運動であること、水中運動としての様々な利点を持っていること、障害の発生率が少なく安全なスポーツであることなどから、性・年齢を問わず広く親しまれているとともに、病氣・障害の治療の手段・リハビリテーションの一環としてあるいは、生活習慣病とメタボリック・シンドローム、「ムーブレス・シンドローム（動かない・動けない症候群）」<sup>※1</sup>の予防対策の1つとしても活用されています。

しかし、一方では、水という媒体の中で行う運動という特殊性から起こる水泳に特有な重大な事故をきたすことがあります。

代表的なものは、水泳中および直後に発生する急死事故および重篤な脳・血管系および心・血管系事故、でき水・でき死事故、飛び込みによる頸椎・頸髄損傷事故、吸・排水口事故等です。スポーツあるいは健康増進のために行っていて、死に至るあるいはきわめて重篤な後遺症障害をきたすことは、本人はもとより家族の肉体的・精神的苦痛をきたすとともに、経済的負担を強いることとなります。また、周辺の仲間、団体・組織、そして国家にとってもきわめて大きな人的損失をもたらします。

したがって、こうした重大事故の実態を真摯に

受け止め、それらの事故の背景と発生要因を分析し、具体的予防対策を講ずることが必要です。さらには、水泳に関わるあらゆる人々に、それぞれの立場から危険因子を少しでも低減する努力と工夫、教育・啓発を継続することが大切です。

「重大事故を0にする」ことが理想ですが、現実にはきわめて難しいことも確かです。しかし、客観的・科学的分析データを基にしつつ、水泳を愛する人々が手を結び合って、現状を少しでも改善するように力を注ぐことが必要です。そうした営みの積み重ねにより、水泳が安全で効果的で楽しいスポーツ・運動として、一層社会の中で広く普及・振興していくものと確信しています。

## 1. 水泳プールでの重大事故の実態

### (1) 一般の水泳プールでの重大事故

平成12（2000）年～平成17（2005）年の6年間に、東京都内の水泳プールで発生し、東京消防庁の救急隊が医療機関に搬送した事案1,357例の

注1：運動・身体活動の不足に伴って起こる健康障害の総称。健全な運動器を通して、日頃から運動習慣を身につけ、一人ひとりの健康と幸福と自己実現に結びつけようという理念。

〔運動器の10年〕日本委員会を介して武藤が提唱、2007年1月）

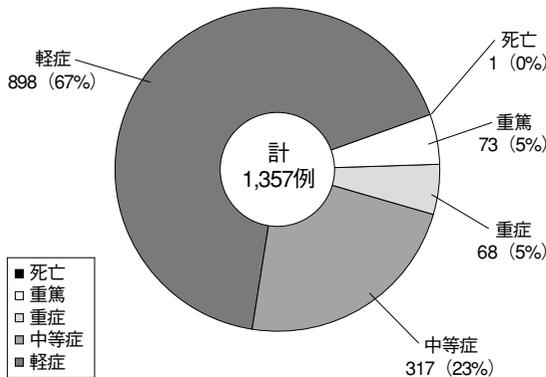


図1 水泳プール事故の重症度別内訳  
2000年～2005年の6年間に、東京都内の水泳プールで発生し、東京消防庁の救急隊が医療機関に搬送した事案1,357例の統計

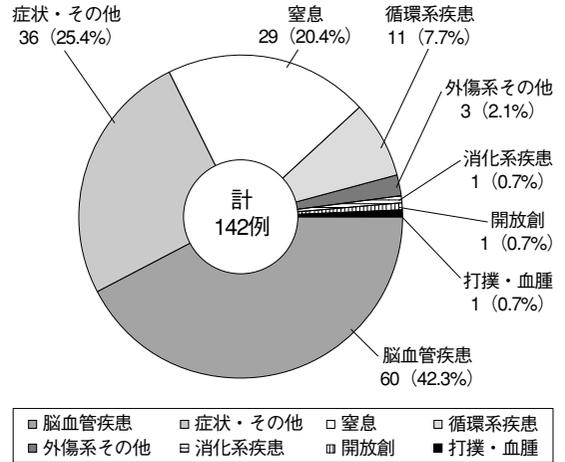


図2 水泳プールにおける重大事故の初診時傷病名別内訳  
出典／図1同様

統計を整理すると、「死亡」「重篤」「重症」を合わせて142例（10％）であり、およそ10件に1件の割合で重大事故が起きていることがわかります（図1）。その142例の初診時傷病名別内訳を見ると、「脳血管疾患」が42.3％と最も多く、次いで「症状・その他」25.4％、「窒息」20.4％、「循環系疾患」7.7％の順であり、重大事故の半数近くは脳血管疾患でした（図2）。

その脳血管疾患60例の内訳を見ると、脳出血等が45.0％と最も多く、次いでくも膜下出血38.3％であり、両者で80％を超えます。以後、「その他の脳血管疾患」「脳梗塞等」と続きます（図3）。

以上をまとめると、水泳プールで救急搬送される事故の1割が重大事故であり、その内訳としては、脳血管疾患、とくに出血（脳出血、くも膜下出血等）による重大事故が主体を占めることがわかります。

## (2) 学校の水泳プールでの重大事故

日本体育・学校健康センターの平成4（1992）年度～平成13（2001）年度10年間の統計資料を

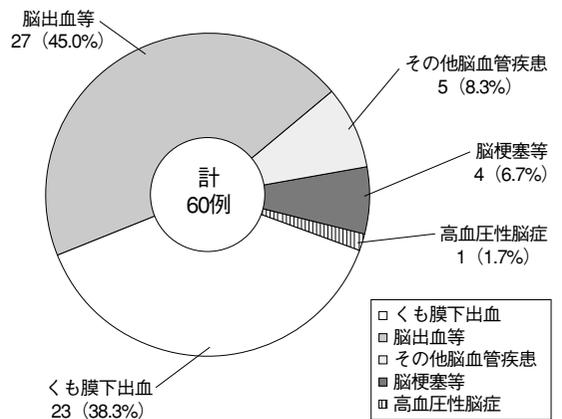


図3 水泳プールにおける重大事故のうち「脳血管疾患」の内訳  
出典／図1同様

整理してみると、体育活動中の障害事故は小学校、中学校、高等学校と校種の遷移に伴って件数が増大しますが、水泳時の障害事故は、小学校、中学校、高等学校ではほぼ同様に発生しています（図4）。一方死亡事故の発生件数を見ると、体育活動中のものは校種の遷移に伴って増加していますが、水泳時の死亡事故は、小学校で発生したものが最も多く、次いで中学校、高等学校の順となっており、また、水泳に伴う死亡事故の割合が、小学校76％、